



理事会だより (10・13)

一、秋季俳句大会について、長谷川事業部長より実施の総括報告、寶子山会計部長より会計報告。

二、梅まつり俳句大会の投句案内を各グループに配布 (木村・須田理事)

三、秋の吟行会は予定通り11月8日大磯城山公園郷土資料館を確保出来、詳細を担当の広報部より説明し参加見込み人数を聴取(約20名)。

四、会長より秋季大会の類似句問題につき報告と提案
①入賞作品に前年度桜大会入賞句と類似句があり会則18条による審査会で審議し、性善説に立って入賞取消とはしないこととして結了。
②その後当該二句の類似句を同一作者が某新聞俳句欄へ投稿していることが判明。
③審査会で審議し当該作者に今後の適切な対応を求める文書を梅まつり案内に添え事業部長名で通知する。
④審査会の運用の具体的な基準について今後検討して理事会に提案する。

「俳句おだわら」10句抄 (662号より)

長谷川きよ志 抄出

白蓮や終日止まぬ水の音

災害なき湘南好み水を打つ

溶接の火花は星に夏果てぬ

衣桁掛姉のおさがりうす衣

朝顔や蕾かずかず高話

日々迷ふ小さき判断秋海棠

飛石の苔に光りや墓参

人類の愚か許さじ原爆忌

新蕎麦に列なしてゐる峠茶屋

焦臭き国境でで虫がのそり

宮崎悦女 抄出

万物の影虚ろにす残暑かな

いただきし西瓜赤子のごとく抱き

父の日や座右の銘は「ありがとう」

蜻蛉無限阿蘇の伏流水の湧く

蝉の声時どき止んで一人かな

愚痴言ふは嫌ひポンポンダリアかな

怒る事忘れし父や梅雨の月

朝顔の「団十郎」と初見参

白粉花母は生涯化粧せず

宇宙って何みょうが花咲く二個三個

香川 花子

山崎 悦子

瀬戸 悠

齊藤 静

片野 節子

佐宗 欣二

古屋 徳男

岩本ひさみ

植松テル子

杉山あけみ

石井千代子

久保寺トミ子

加藤れい子

小林 環

中野 文子

西賀 久實

百川 秀子

井上 和子

小林永以子

大石 和子

俳句おだわら(10・19)切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(9・30)

風白しめぐる木道車椅子

芦ノ湖を見下ろすランチ秋の色

晩鐘や川面に湧きしあきあかね

初紅葉母の匂ひの帯締めて

晩学の秋燈引き寄せ墨を磨る

◆たけのこ(9・28)

羽根としてトンボの憩ふ水の国

秋風や返事しさうな夫遺影

庭先のはみ出す柿の直売所

秋冷や遺影の友夫は片手あげ

丸投げで遺して秋の風逝かす

◆山北(9・22)

断捨離を思い出したる秋桜

介助者の肩の手ぬくし敬老日

蝉むくろローカル線の乗車口

小鳥来る戦火を遁れて来たのかも

縁側に丸いちゃぶ台衣被

施設抜け病院を抜け鯛雲

久江報

足立 和子

川本 育子

高橋 小糸

山崎 悦子

近藤 久江

悦女報

小宮 早苗

三木 泰子

久津間百合子

徳田 公子

宮崎 悦女

由里子報

和田恵美子

尾崎 幸子

中山 妙子

尾崎 竹詩

石田加津子

竹下由里子

◆実のり(10・12)

釜炊きの新米の粒袴禊し

麦飯やとろるとろとろとろとろ汁

靴音にリズムのありて秋のこゑ

冬瓜の矢鱈と下がる垣根かな

◆沈丁(10・6)

紐確と結はふ垣根や秋気澄む

篠笛や色なき風を道づれに

顎澄まし鬮魂猪木秋の暮

最澄の教へにすぎる秋の暮

秋の蜘蛛ひとりじいつとただじつと

忘れ物したよな気持ち秋の暮

言ひ訳の徐々に早口秋の夕

人去りて鳥の集まる刈田かな

目の澄みし鯛や匂のもの選ぶ

荷物持ち互いを杖に蓼の花

秋の暮一本松よいつまでも

大陸の寒きたよりに秋の暮

換気扇また廻りだす秋の暮

◆春野(9・18)

金髪でピアスの男の子稲架を組み

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

寶子山報

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子

瀧本 敦子

勝木 澄子

菅野 英余

高井 幸子

片野 節子

峯尾ユキエ

河本チヨ子

清水美代子

寶子山京子

きよ志報

秋山 昇

芒原抜け幼子は金色に

伊藤はる子

秋の日や箱根連山凜と立つ

大塚 行人

山巖に霧立ちこもる父祖の里

内田知江子

三島社の回廊の傷秋深し

湯本とし子

一族のペンからキリや秋彼岸

尾崎 一夫

秋晴や猫乗せて行くコンバイン

加藤まり子

黒葡萄食みゐて企むこともなし

瀬戸 悠

稲刈るや鴉五・六羽ついて来る

久保寺トミ子

鳴ききつて草に転げる法師蟬

二見 和江

斧かざす性の哀れの枯蟪蛄

田渕 令子

項垂るるダリアエリザベス女王逝く

長谷川きよ志

古九谷の紺青深き白露かな

田中 幸子

◆香雨・梅ごち(9・25)

忠山報

◆みなみ(9・17)

かほる報

秋雨や一人窓辺でカプチーノ

肥後ちさこ

分け合うて病む人と食むマスカット

加藤れい子

あの頃のままの川原や虫すだく

関戸わよこ

肩車の子が手を伸ばすぶどう棚

加藤 健治

ひと雨にこゑ洗はれて虫の秋

青山 典子

神の住む山より紅葉始まりし

市川めぐみ

長き夜や昭和かなづるLP盤

門松 鳳文

蝗とるおさな心にある山河

豊田 幸枝

ひたひたと波打ち寄する秋の暮

吉田 百代

歳時記の月日の手擦れ秋に入る

斉藤 静

いりあひに秋耕いそぐ老農夫

吉田 康雄

この庭が好きだと来たる赤とんぼ

小瀬村信子

老いてこそはらから良けれ衣被

陌間みどり

ねこじやらし猫の教える朝の道

加藤 富江

きちきちや葉の水玉を撥ね上げて

小澤 純子

叢を終の栖にキリギリス

加藤かほる

わが影に道せかさるる秋の暮

池田 忠山

◆鷹(10・8)

十五報

◆こよろぎ(10・13)

つとむ報

そばの花移住家族に嬰兒生まる

青木 孝子

友と行くコスモス畑直売所

板谷 雅泉

セロ弾きの肘やはらかし十六夜

池田 令子

錦秋の鎌倉五山晴れ渡る

植松テル子

世かしまし野地にしやらしやら小判草

西賀 久實

鉢そろひ人形そろひ菊日和

神山つとむ

並倉に出でて赤しや今日の月

佐宗 欣二

◆青梅(10・12)

幸子報

鳥籠を吊るす花屋や秋麗

須田 晴美

花槿すべて無とせむシユレツダー
 月の出や轍の草の起き上がり
 水底にわき上がる砂秋気澄む
 昼中の同窓会や小鳥来る
 秋薔薇やみな普段着の聖歌隊
 素振り繰り返す少女や秋夕焼
 さはやかに繰り出せる紐本括る
 かけてみてまた拭く眼鏡十三夜
 家を売る実印押しぬ秋の風
 稲架組める棚田に灘の入日かな
 天高し仔犬震へる初散歩
 小春日や配当金を荒使ひ
 葛飾の袖笠雨や菊籬
 下午の日に咲き放題の鶏頭花
 馬柵沿ひに歩を進めたり霧の中
 虫の音や浅田次郎に袖濡らす
 在宅の母を見舞ふや菊脛
 門灯の真下の草やちちる虫
 流木に坐る中州や雁渡し
 なつかしき発車メロデイ秋の山
 今朝熟れし無花果一個半分こ

中田 笑子
 百川 秀子
 山崎美知子
 柏木 良花
 庄司 下載
 瀬戸 りん
 高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 大木 敬子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 加藤 幾代
 守屋 まち
 米山 翠
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環

信濃路の仏も住まう花野かな
 真つ当に生きて九十鳳仙花
 紅葉狩溪流の音絶え間なく
 谷まるごと葛に占領されてゐる
 ◆おほる(10・12)
 旨い秋何を食べても肥える日々
 蝗とり追って追われて今昔
 稜線を引きし箱根や里は秋
 秋吟行声の飛び交う浜生句碑
 富士映えて秋が山から降りて来る
 コスモスや素顔のままの四季の里
 団栗や祈るがごとく句碑に添え
 過ぎし日の歴史の重み秋の山
 回想の奥へ奥へと秋の句碑
 団栗が生徒の如し浜生句碑
 友弾む「案山子祭で賞取ったよ」
 秋深し栄枯盛衰足柄路
 ◆零(10・19)
 少年の遙かな想い天高し
 子を妻を想えば憶良ななかまど
 秋バラを孫と曾孫と小窓から

下平 美子
 鳥海 壮六
 古屋 徳男
 村場 十五
 秀泰報
 中津川晴江
 加藤 春江
 中村 昌男
 高橋みどり
 香川 花子
 石井千代子
 石井きよ子
 廣田 悦子
 中根登美子
 小野 菊土
 二上 光子
 風間 秀泰
 史郎報
 青木たけを
 伊藤 道郎
 井上 良子

長雨に打たれつもなお光る黄菊

秋霖や今昔感の空家あり

秋晴やきりつと反りし大鳥居

秋霖や胡弓弾く眼に心見る

門越えて紫苑は師の帰り待つ

◆草むら(10・20)

旅の宿共に床とる菊枕

友等逝き学徒たりし日風は秋

紋白蝶禁断症状のままである

干戈の空もありけり秋夕焼

◆無所属

夜半の秋無性に文字を食べたくて

木犀を吹き来し風にシヤツ乾く

路地多き漁師の街や鳥わたる

緞帳のようにサッシ揚げたる満月に

栗を食ぶ縄文人の置土産

花火師の影の一瞬揚火花

赤い羽根二つ三つと溜まりけり

穴惑ひまなこ空ろに道過ぐる

地虫鳴く葉っぱは葉っぱで鳴いている

箒草ふわふわ赤い空気かな

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

岡本 史郎

重満報

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

畠 梅乃

一ノ瀬茂代

蓑宮 わか

北村 文江

出澤 洋子

岩楯恵津子

木村美千代

大石 雄介

大石 和子

手指消毒台風直撃は困る

十月や鉄扉がきしむあばら骨

変わることに変わらないうこと秋長雨

爽竹桃八十路の我を夫知らず

秋の浜影より冷えて暮れにけり

レジに置く重き一房マスカット

海賊も昂揚すなり秋の湖

ブリューゲル枯木ばかりで偏頭痛

卵割りそこねても秋うらけし

くちすぎの苦勞一枚たばこ干す

伐採の向きを変えれば秋動く

福引に外れてもよし秋祭

アイスクリーム頭痛犬神に崇られて

毬栗やちくり心に突き刺さり

苦い腑サンマはらわた似の恋もあり

瀬戸 正洋

山本 すみ

穂坂志げる

山田 照子

田畑ヒロ子

岡田 典代

山口 千代

柴田 礼子

杉山あけみ

大佐田うづき

小澤 園子

須田 聡子

小島ノブヨシ

木村予史重

(十月号追加)
柴田 礼子

*

岩楯恵津子

(令和4年8月号)

息の出来ぬ程 蕨の絡まる夏館

長谷川きよ志

「息の出来ぬ程」の表現が、他には無かった様に思いました。私の理想は、若い頃から蕨の絡まった家に住んでみたい事でしたので、とても気を引かれ、目の前にその素敵な夏の涼しそうな家がガンと現われて、いろいろ想像がふくらみ楽しい句となりました。

高橋久美子

(令和4年8月号)

平和詩に込めた小二の沖繩忌

中津川晴江

令和四年の沖繩慰霊の日、小学二年生の少女が自ら綴った詩を発表した。テレビで放映されたその様子は、はっきりとした口調で内容も素晴らしかった。作者もその感動を素直に句にしたのだろう。「平和詩」の表現が少し窮屈かと思うが内容は十分に伝わっている、今迄とは違った沖繩忌の感じがした。

少女が問いかけた「平和って何？」という言葉は、今も重く響く。

出澤 洋子

(令和4年8月号)

いざこざの絶えぬこの星ソーダ水 北村 文江

一読して自分の身の回りのいざこざ、面倒くささもソーダ水でも飲んで一時すっきりしたいと思った。でもこの星である。地球の至る所でいざこざが絶えない。難民が世界のあちこちで溢れている。さらにロシアとウクライナの戦争もいよいよ長期戦の構えになってきている。そして人の命が泡のように簡単に消えていく。ソーダ水は軽くて重くて、意味深な語になった。

一見 和江

(令和4年8月号)

蜜豆や良くも悪くも平均点

瀬戸 りん

テストの結果でしょうか、今の私ですと健康診断の結果のことかも知れません。どっちにしても平均ということとはちょっとほととするものです。特によくはないけれど、まあいいじゃないかと受け入れる気持ちですが、蜜豆という季語で語られていると思えました。館蜜でもなく、ましてや豪華にクリームやフルーツは入っていない蜜豆と平均点という言葉に、日本人らしさを感じました。

徳田 公子

ちちろ鳴く帰らぬ息子待つ厨
紅葉晴温泉卵と富士山と
柚子味噌やこれ一番と夫の笑み
人気なき厨ですするところ汁
三年ぶり咲いて可憐な帰り花

斉藤 静

読み返す便り夜長の静寂
一茶忌や灯して暗き蔵座敷
散策のいつもの道も初冬かな
夕日影土蔵格子の蔦紅葉
千枚田藁火ほのぼの暮の秋

石井きよ子

ミルクティーにそつと息かけ今朝の冬
今日もまたお供は母の冬帽子
鯛焼や割って少しの後悔か
黄昏に誰を迎えし花八手
寒造暖簾の奥の薄明かり

青山 典子

秋めくやおとづれ早し北の国
秋の海移りゆく季にます蒼さ
連山の近くになりて秋澄めり
新涼や村はみのりの風が吹く
あれこれと旅行プランの虫時雨

来田 新子

ふるさとを友と唄ふや十三夜
宅急便重たき音や秋時雨
旅立ちの朝の目覚めや尉鷄
振舞ひの新酒赤飯創業祭
岸壁に隆起の歴史渡り鳥

山口 千代

木のかたち家の作りに蔦茂る
月光は生きる証か九時消灯
故里の余白を埋めて稲穂立つ
百才を越えし恩師や秋澄めり
尼寺へ火種のような曼珠沙華

二上 光子

電球の光り柔らか夜なべかな
縁側で親子だんらん月見かな
茜雲虫も鳴いてる町平和
コスモスに慰められる医院庭
連れ合いて夢に向かいぬ大花野

◆十月号についてお詫びして訂正します。

2頁上段作者名

(正) 寶子山京子 (誤) 寶珠山京子

日めぐり／中野文子遺句抄（寶子山京子抄出）

梅咲くや四国巡礼旅支度

髪切つて春の野山へ飛び出しぬ

梅雨冷えや子猫のねむるバスケット

まくなぎやはづれさうなる付まつげ

風土記読むしどろもどろや百日紅

老い初めてまぶしきものに唐辛子

絵文字解く一行二行夜の長し

回覧板渡す子の丈木槿垣

下張りは歴史の宝庫日向ぼこ

自転車の籠に溢るる師走かな

日めぐりの最後大吉年送る

奉仕の人

寶子山京子

沈丁句会発足より約二十五年間、文字通り柱として居心地の良い句会作りに力を尽くしてくださいました。句会場所の予約、欠席投句の受付、発送諸々、まさにおんぶに抱っこでした。小田原俳句協会では総務部長を務められ、大会のお弁当の手配、コピーなど毎回労を惜しまず、黙々とこなしていらつした姿が鮮明に想い出されます。そんな文子さんは沈丁句会の希望であり、目標でもありました。六月の句会直前に突然の入院、七月十三日退院。病院から元気なお声と投句をいただいたり、いつも通りの文子さんに安心していました。文子さんの俳句は、外連味がなく率直円満お人柄そのものです。しかし

カーテンの中の孤独や青嵐 七月投句

蝉の声時どき止んで一人かな 八月投句
に、はっとしたのは私だけではなかったようです。

八月十二日、「お亡父さん連れてきたよ」とご長男夫妻が、お盆のお墓参りから戻って来られました。翌十三日、大好きなご家族に見守られ九十年の幕を下ろされました。わが沈丁句会のレジエント中野文子さん、お世話になりました。ありがとうございました。

城苑俳句・冬の部

(合同句集第十二集84〜93、10〜15頁より近藤久江抄出)

一切を封ずるごとし枯木山
 転居して同じ街なり雪の富士
 一湾に黒潮遊ぶ冬の虹
 切干や吸はれてしまひさうな空
 夢追うて果てなく卒寿初明り
 八十路とて薄紅さして初詣
 存分に枯れてかがやく枯野かな
 茶の花やわれに寄り添ふ杖の音
 背表紙の黒き聖書や冬ともし
 卒寿このしかと生きんと初鏡
 風呂場より九九復習ふ声冬の星
 一本の杭が風生む枯野原
 初鴉田圃に下りて二歩三歩
 老二人葱の青さも馳走なり
 星型のクッキー焼いてクリスマス
 雑踏の中のやすらぎ年の市
 鳶の舞ふ峡の高空冬初め
 風邪の子の飲めぬ薬に魔法かけ
 気忙しく生きる証の十二月
 冬空を広げて庭師帰りけり

村場 十五
 百川 秀子
 森 正勝
 守屋 まち
 柳川 楊雨
 柳澤ミサ子
 山岸 秋光
 山口安規子
 山口 千代
 山崎 悦子
 山崎美知子
 山田 照子
 山本 勝昭
 湯本とし子
 吉田 百代
 吉田 康雄
 米山 翠
 若村 京子
 和田恵美子
 和田 瓊子

沈むもの沈めて閑か冬の川
 大屋根の雪に日のあり峡深し
 大根干す妻に日差しの限りなく
 一輪車追ひかけてゆく落葉かな
 神杉に声高らかに初鴉
 落葉して幹は男の貌をもつ
 白鳥の恋ふ恋ふと啼き翔つ構へ
 綿虫を追ひかけ童女となるわたし
 霜柱踏めば地球の軋む音
 夢にある母は歩きぬ返り花

青木 勝子
 青木 孝子
 青木たけを
 青山 典子
 秋山 昇
 足立 和子
 新井たか志
 新井 英子
 飯田 愛
 池田 令子

令和四年年間ベスト一句集案内

一、全会員に、令和4年中の作品からベスト一句を
 自選していただきます。協会報とは限らず各人
 の全発表作品を対象として下さい。
 一、各グループごとにとりまとめて下さい。グルー
 プの責任者には別途そのお願いをさし上げます。
 一、無所属各位は、広報部あて「ベスト一句集」と
 してはがきで送稿して下さい。
 一、メ切り 令和5年1月13日(2月号掲載)
 一、送稿先 〒250-0042 小田原市荻窪五四九-一七
 小田原俳句協会広報部 村場十五

第12回おいゆめの里俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「野遊び」「春灯」（いずれも傍題可）

各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和五年一月十一日（水）必着

整理費 一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子一四一

小野菊土 ☎〇四六五（八三）〇八八〇

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 俳句協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）

賞 町長賞以下十五位まで

第二部 俳句大会

日時 令和五年三月四日（土）

会場 町立そうわ会館（大井町山田五〇二）駐車場完備

☎〇四六五（八五）一六〇一

送迎バス小田急線新松田駅十一時三十分

受付 十一時 投句締切：十一時五〇分 開会：十二時

整理費 五百円

席題 春季雑詠一句と当日発表席題一句 相互選

賞 五十位まで

（主催）おほる俳句会（後援）大井町 大井町教育委

員会 大井町文化団体連絡協議会

小田原俳句協会 神奈川県俳句連盟 各地俳句会

『零』句集第18集一句抄（令和四年六月発行）

大根の穴の数だけある戦禍

木村 和彦

夏の夜の楽観論対悲観論

青木たけを

柵を解いてなんだかあめんぼう

伊藤 道郎

大根はなんにでも合ううまいもの

井上 良子

遺書に秘す子への詫び言蜆汁

岡本 史郎

アメンボの真似して池に沈みけり

川合 亨

春の鴉カフォーカフォーワッハッハッて鳴くんだよ

川合 昌子

バームクーヘン七層程の残暑かな

小林永以子

刃物かな才能なのかトマトニミリ

佐藤 正子

冬青空丹沢と威を分かち合う

中村 裕子

麦藁の籠に双子のわら人形

野川木一路

※梅まつり俳句大会（令和五年二月五日）には、

各グループは結社賞をご用意下さい。（事業部）

理事会日程 11/10、12/8（十五時）、

1/12（十八時）

一月十二日は会場の都合で十八時開催につき注意。